

ヘンリー8世 および トーマス・モア

倉 田 稔

16世紀初頭の England は、ヘンリー8世 (Henry VIII、1491-1547、在位 1509-1547) の時代であり、彼は、まれにみる専制君主だった。その彼が、自分の父・ヘンリー7世を、大変な悪人だった、と言うのだから、ヘンリー7世はもっとすごかった。ただし、悪人というのは、現在でいう意味ではない。

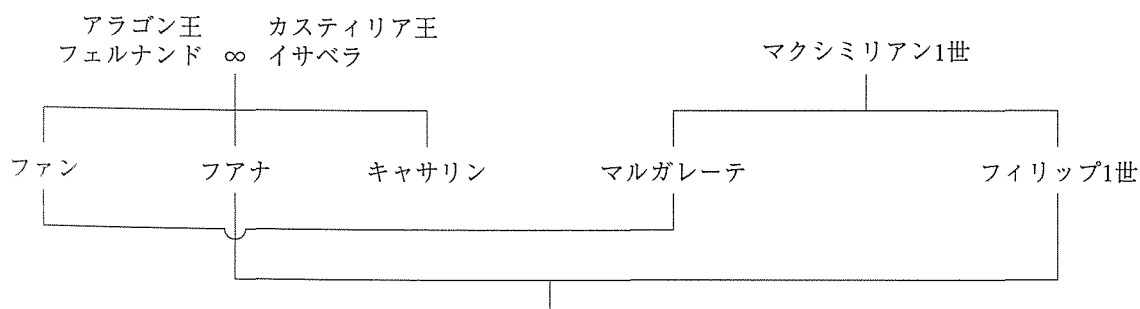
キャサリン・オブ・アラゴン (Catherine of Aragon、1485-1536) は、スペイン王フェルナンド2世 (Fernando、1452-1516) とイサベラ女王 (Isabel、1454-1514) の末娘であり、1501年に、ヘンリー7世の息子・アーサー王子と15歳で結婚した。この女王イサベラは、コロンブスと新大陸発見を契約した女王である。この結婚は、スペインとの同盟関係を狙ったイギリスの政略だった。逆に、スペインもフランスと戦っていたので、イギリスと同盟してフランスを包囲しようとした。キャサリンの兄姉は、フランス以外の諸国の王女・王子と結婚した。フアンとフアナ(1)は、ハプスブルクとである。

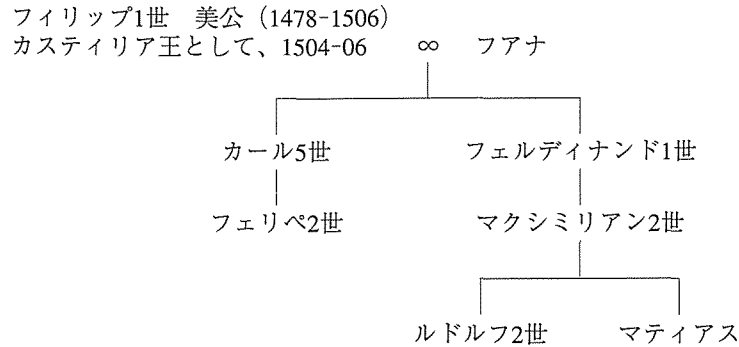
だが太子アーサーは1502年に、よう折した。そこで、父ヘンリー7世は、未亡人となったキャサリンを8歳下の次男ヘンリー(後の8世)と、1509年に無理矢理に結婚させた。これもスペインとの同盟関係を狙った政略である。

キャサリンは、ヘンリーとの間でメアリー (Mary、1516-58。後の1世。在位 1553-58) を生んだ。だが、20年間男子を生まなかった。死産が続いた。

スペイン王カルロス (Carlos) は、フアナとフィリップ・フォン・ハプスブルクとの間の息子である。彼はカール5世 (Karl、1500-58) として神聖ローマ帝国皇帝になった。1525年に、カールは、パヴィアの戦いでフランスに大勝利した。フランスはイギリスの強敵だった。ヘンリー8世はスペインに脅威を感じた。イギリスの大法官・枢機卿ウルジー (Wolsey、1475?-1530) は、——シェークスピアの『ヘンリー8世』では Cardinal となっている——ローマ法王の全権大使であり、England に女=愛人を持っていた。法王はカール5世に屈服していた。

ヘンリー8世は大変な浮気者であった。もちろんほとんどの国王はそうである。彼は、アン・ブリン (Anne Boleyn) (2)が好きになった。アンは、貴族の娘で、フランス帰りの若い可愛い女性で、ブリン家の末娘=2女であった。ウルジーの親戚のパシーとアンとは、将来を約束していた。だがその結婚をヘンリー8世は認めなかった。彼は妃キャサリンがいやになり、アンを宮





中に入れた。つまりキャサリンの腰元にした。こうすれば、いつでも会えるというわけである。ヘンリー8世は、アン以前にも、アンの姉・メリーを恋人にしている。父・ブリンは、そのために出世したが、彼女・メリーは、妊娠させられて、捨てられてしまった。アン・ブリンは、そんなヘンリー8世の愛を拒絶していた。当時の専制君主の言うことを聞かないとは、大変強気であった。これは、ヘンリーがアンに惚れていたから、できたことである。一方、アンの恋人パーシーは、ヘンリー8世によって年寄り女性と結婚させられた。ヘンリーは外堀を埋めたのである。アンは、とうとう拒否できなくなった。そこで、結婚してくれれば受け入れると答えた。ヘンリーは、そこでキャサリンとの離婚を工作した。1529年5月に、キャサリンとの離婚裁判が始まった。ヘンリー8世が離婚したいという表面上の理由は、キャサリンが男子を生まないことであった。

1529年に、議会は王の翼賛となった。アンはヘンリーに体を与えなかった。アンは、生まれて来る子の王位継承権を問題にしたのだった。自分を妃にするならば結婚する、と言った。彼女は、姉のようにはなりたくなかった。そしてアンは、男子を生むと言う。ヘンリー8世は、キャサリンとの離婚の手続きをウルジーに命じた。それを聞いてウルジーは、全世界を敵にまわすことになる、と答えた。王は、婚姻の無効を告げにキャサリンのところへ来た。王妃キャサリンは、まず離婚を信じられなかった。キャサリンは拒否した。ヘンリー8世は、息子がほしいという。彼は、1530年、キャサリンとの結婚の無効を法王に提出した。ウルジーがローマへ請願をもっていった。だがスペイン皇帝がローマ法王を攻めて、法王は拒否した、と言うのだった。ヘンリー8世がローマ法王に大金を出していれば、この件はうまくいったかもしれない。

ヘンリー8世は、ウルジーを解任した。後任にトマス・モアをおいた。モアは大法官 (Lord Chancellor) となった (1529年就任)。ヘンリー8世は、離婚が拒絶されると、ローマ教会との断絶を決意する。イギリスで、王が「イギリス教会の保護者にして地上唯一の首長」であることを認めさせた。司教フィッシャーは、それに反対した。ヘンリー8世は、ローマからの使者を追い出した。トマス・モアは発言しないことにした。こうしてイギリスでは奇妙な形で宗教改革が行なわれた。王はカトリック教会から離脱し、英国における宗教改革を実行した。そして英国教会＝アングリカン・チャーチ (Anglican Church) を作った。キャサリン離婚問題で、モアに危険が迫った。モアはカトリックであり、ローマ・カトリックでは離婚が認められていない。ローマ法王はヘンリーの離婚を認めない。モアは二律背反におちいったのであった。

1532年、アンはとうとう体を与えた。アンは妊娠する。1533年、ヘンリー8世は、キャサリンとの結婚の無効を宣し、アンを王妃に認めた。そして戴冠式を行なった。この間、1533年5月 アン・ブリンとヘンリー8世の結婚式が行なわれた。アンの子は、後のエリザベス女王である。この5月にモアは大法官をやめたのである。イギリス国内では、結婚は正式に認められた。国際的

には、つまりカトリックでは認められなかった。キャサリンの娘メアリーは庶子になった。だがアンが生んだ子は、女なので、ヘンリー 8 世はがっかりする。

国王＝議会側は新法令を作った。1533 年 4 月に、モアは「王位継承法」への宣誓を求められた。だが彼は署名を拒否した。1534 年、ヘンリーは国王至上法を出した。改革派＝国王側の大立者の 1 人は、トマス・クロムウエル(1485-1540)であった。More は、1534 年にロンドン塔(The Tower of London) (3)に投獄された。そして彼は反逆罪に仕立てあげられた。The Tower of London は昔は、今と違って、物さびしい荒涼たる所であった。ウィリアム征服主によって建てられ、はじめ London 市の防衛を目的としていた。だが、その後、監獄としても用いられた。中央に White Tower があり、そのまわりに、城壁でつながれた 13 の塔が建っており、その外側に防壁がある。ほぼ四辺形である。(4) More の投獄されたのは Bell Tower らしいが、これは現在見学できない。Bell Tower での囚人 More の生活は、もちろんひどいものであった。不自由で、房の歩く場所がせまく、おまけに湿気がひどかった。1 年 2 ヶ月ほど在監したが、国王は途中で書物・文房具をいっさいとり上げた(5)。

1534 年 7 月に、モアはウェストミンスター・ホールで裁判を受けた。起訴状に堂々と反論したモアに、死刑判決が下った。1535 年 7 月に判決を受けた。だがその後、ヘンリーは、モアの人格・学識を考慮して、死一等を減じて首切りの刑となった。当時の刑には、八つ裂き、火あぶりがあった。現在 Bloody Tower (血の塔) に、首切り用の斧と首切り台が展示されており(6)、More はこの種のもので殺されたのであろう。7 月 6 日に処刑された。同日、London Bridge に首がさらし物になった。こうして「中世最悪の犯罪」が行なわれたのである。この首は後にセント・ダンカン教会に埋葬された。

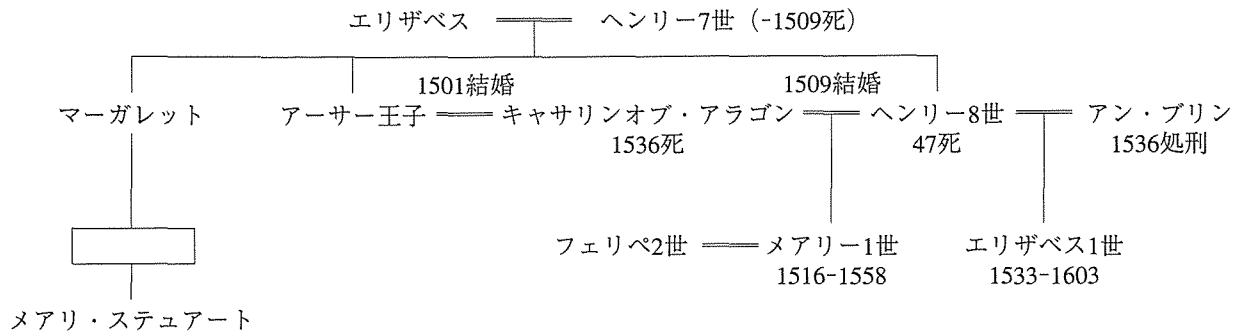
オペラ『ヘンリー 8 世』は、カルデロン、シェークスピアとフレッチャーの戯曲をもとに、デトロワイヤとシルヴェストルが台本を書き、カミーユ・サン＝サーンス (1835-1921) が作曲した。1883 年、パリ・オペラ座で初演された。ちなみに、サン＝サーンスのオペラには他に「サムソンとダリラ」がある。

このオペラは 4 幕ものである。そのストーリーは、フィクションが入っているが、最後の部が大変よい。スペイン大使ドン・ゴメス、ノーフォーク公が、キャサリンを守っている。ゴメスとアン・ブーリンは愛し合っている。バッキンガム公は王の友人となっている。

この続編は、ドニゼッティのオペラ「アンナ・ボレーナ」、ロッシーニの「英国の女王エリザベッタ」、リロ「カタリーナ・ハワード」がある。映画では「ヘンリー 8 世の私生活」、ジュヌヴィエーブ・ブイヨルド主演「1000 日のアン」がある。

シェークスピアは、戯曲『ヘンリー 8 世』を書いている。しかし彼の他の作品と較べれば、余り面白いものではない。

さてヘンリー 8 世は、アン以外に再び新しい愛人を求める。ジェーン・シーモアに目を移す。これも表面上の理由は、アン・ブリンが男子を生まないことであった。ブリンは、シーモアの追放を命じた。継承権法が問題となり、ヘンリー 8 世王は、シーモアを宮廷に戻せ、男の子を生ませただけだと、アンに言う。アンはエリザベスの王位継承権を求める。王は、モアら反対者を殺すのだった。アンは男の子を死産する。一方で、かつての王妃キャサリンが死んだ。ヘンリー 8 世は、アン追放の理由をさがせ、と部下に言った。これをクロムウエルが画策した。彼らは、ア



ンの情人をでっちあげ、愛人としてフランシス・ウエストンがあがった。そして彼を拷問した。アンは「不貞」で逮捕された。ヘンリー8世は、アンを姦通の罪で、1536年に逮捕する。アンは、ロンドン塔へ送られた。王の友達、ヘンリー・ノリス卿ら、アンの兄、も捕まった。アンは不貞と近親相姦として罪を着せられた。王は、しかし疑い、確かめにくる。アンは、追放を拒否し、娘の継承権のために、王妃として死ぬことにする。王は署名し、1536年 アンは剣で斬首される。アンの結婚は無効となった。エリザベスは庶子になった。ヘンリー8世は、こうしてジェーン・シーモアと結婚する。

ヘンリー8世の宮廷で、6人の王妃がいたことになる。キャサリン、アン、に続いて、ジェーン・シーモア（1509-1536）である。彼女は王子を生んですぐ死去した。王子は、後にエドワード6世（1536-1553）になる。

次に結婚したのは、アン・オブ・クレプス（1515-57）である。シーモアに死なれてから、ヘンリー8世は、結婚相手を探した。そこでフランドール人アンを迎えることにした。というのは、絵＝肖像画を見て、決めたのである。しかし実物に会って見ると、絵とは違って、ヘンリーはがっかりした。1540年に結婚したのだが、同年に解消した。彼女は夫に好かれなかった。しかし結婚解消により、年金や財産を与えられて、得をした。

次は、キャサリン・ハワードである。彼女は、侍女であって、若い魅力的な女性だった。1540年に結婚した。だが不倫で、1542年に処刑された。

最後は、キャサリン・バー（1512-48）である。彼女は、夫がいたが、未亡人となった。そこで結婚した。賢夫人だった。ヘンリー8世の面倒を良くみた。そして最後をみとったのである。その後、恋人シーモア卿と結婚し、病死した。(7)

イングランドとスコットランドは分裂していた。スコットランド王は、ジェームス・ステュアート5世であった。1542年に、メアリー・ステュアート(8)が生まれた。父と母メアリー・ド・ギーズは、共に2度目の結婚であった。したがってメアリー・ステュアートは、スコットランド女王、またイングランド王位継承者である。彼女はカトリックであった。一方、後のエリザベス女王は、新教、庶子であった。メアリー・ステュアートは、彼女のいとこの子である。

ヘンリー8世は、スコットランド王・ジェームス5世に改宗を要求する。スコットランドでは、ステュアート家＝国王権力が弱かった。これを法王やフランス、マドリッド（スペイン）が支えた。1542年、ヘンリー8世とのイングランド・スコットランド戦争が開始された。スコットランド貴族は、ヘンリー8世に懐柔され、イングランドとの戦争をけしかけ、戦争では逃げた。スコットランドは敗戦し、戦傷の父は、メアリー・ステュアートの誕生の後、すぐ死んだ。そこで1543

年に、赤子のメアリー・ステュアートは載冠した。アラン伯ハミルトンが摂政になった。

1544 年、ヘンリー 8 世が決意し、その息子エドワードと赤子のメアリー・ステュアートとの婚約をさせた。その娘が死んだら、ヘンリー 8 世に全所有権が移る、ということになった。母メアリー・ド・ギーズは、これに反対した。そこでヘンリー 8 世は、スコットランドに戦争をしかけた。しかし攻めきれなかった。メアリー・ステュアートを 10 歳になったらイングランドへ引き渡すという条件で、満足した。アラン伯ハミルトンは、カトリックに改宗した。

ヘンリー 8 世が 1547 年に死んだ。これでメアリー・ステュアートをイングランドへ渡さなくてもよくなった。メアリー・ステュアートをフランスへ嫁に出す案が出た。1558 年、メアリー・ステュアートは、フランスのフランソワ 2 世と結婚する。同じカソリックであった。

ヘンリー 8 世の死後、その息子エドワード 6 世が統治した。エドワード 6 世は新教派で、6 年の治世だった。その間、サマセット公が失脚し、ウオーリック伯ジョン・ダッドリが代わった。メアリー・チューダー（後の 1 世）は、カトリックなので迫害された。

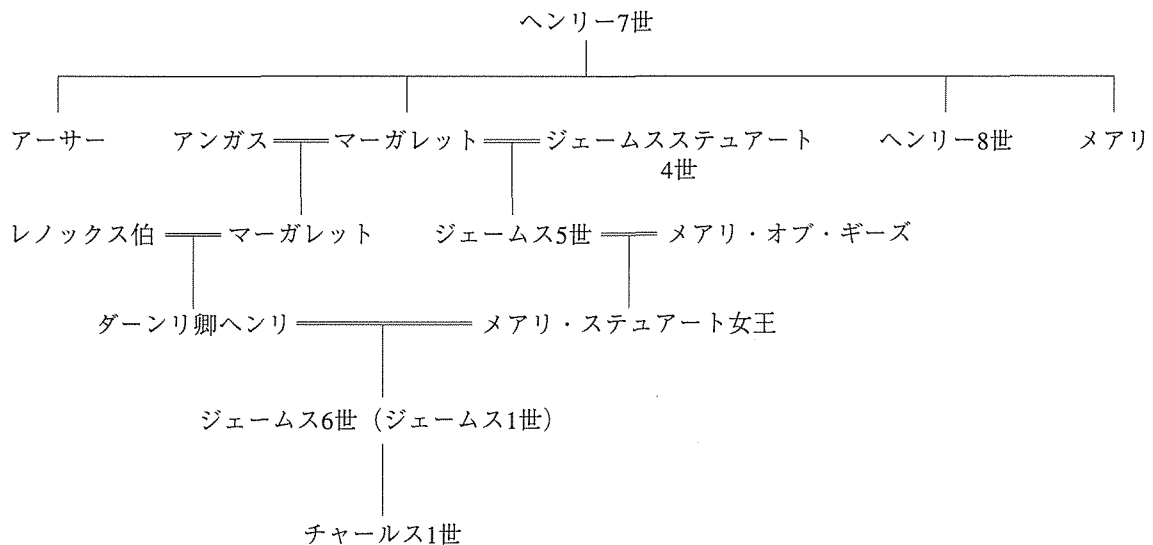
1553 年、エドワード 6 世の死後、メアリー 1 世が即位した。イングランドは、今度はカトリックに復帰した。彼女は報復措置をとった。ウオーリック伯を処刑し、ジェーン・グレイらも抹殺した。

1554 年、スペインのフェリペ王子、後の 2 世は、アルマダでイギリスに来た。イングランドの女王、メアリー・チューダーと結婚するためだった。スペインは、この結婚によって、イギリスを支配できた。カール 5 世は、息子フェリペ 2 世とメアリ 1 世をうまく結婚させた。1554 年、フェリペは 1 年イギリスに滞在した。

メアリー 1 世の時代に、プロテスタントが弾圧され、彼女は血のメアリと言われた。300 人が火刑に処せられた。新教徒のワイアットの反乱が起きた。1554 年にワイアットは裁判にかけられた。これは卿らの謀反とされる。彼は火あぶりの刑となった。メアリ 1 世は、ついでエリザベスの身辺から謀反の証拠を探せと命ずる。嫌疑をうけたエリザベスは、居城からロンドン塔へ連行された。エリザベスは自白を強要された。だが否定した。そして領地に戻される。

1557 年、フェリペ 2 世は、メアリー 1 世のもとを去り、スペインへ帰国した。

1557 年、メアリ 1 世はフランス攻撃をし、負けた。メアリ 1 世は、病気になる。新教徒が England へ続々帰国した。フェリペ 2 世はなんとエリザベスに求婚した。だが彼女はロバート卿が恋人だっ



た。それに彼女はプロテスタントだった。

1558 年 メアリー女王が病死した。ノーフォーク卿、サセックス卿が、カトリックであり、彼女をささえていた。25 歳のエリザベスに王位が譲られた。エリザベスは、アン・プリンの子で、新教の教育をうけた。

1558 年 11 月 エリザベスは、ハットフィールドの館を出て、ロンドンへ即位しに行った。彼女は武人ではない。若い時、牢獄にいたし、名君ではあった。一生独身を通した。後に、スコットランドと戦い、メアリー・ステュアートを殺すし、スペインに何度も暗殺されそうになった。1559 年に戴冠式がされ、25 歳のエリザベスは、弱体国 England を引き受けた。44 年間 (1558-1603) の治世であった。(9)

イギリスは、ヘンリー 8 世により、新教国となった。しかしそれは形だけであり、エリザベス 1 世がイギリスをプロテスタント国にしようと努力したのである。(10)

トーマス・モア (1478-1535) は、1478 年 2 月 6 日または 7 日、London のミルク・ストリートで生まれた。父ジョンは法律家であり、母はロンドンの富裕な市民の娘であった。少年モアは、ロンドンのセント・アントニー・スクールに 1485 年から 90 年ころまで通った。その後 1490 年ころから、ジョン・モートンの小姓または従僕となり、彼のラムベス・ハウスに住んだ。モートンはモアの才能に注目し、「素晴らしい人物になる」と言った。モアは第 1 級の教育を受けた。1492 年に、モートンはモアを Oxford 大学のカンタベリー・カレッジ (今のクライスト・チャーチ) に入れた。彼はその学資を援助した。モアはそこでルネッサンスとヒューマニズムに触れた。

1492-3 年、勉強し、1794 年、2 年足らずでオクスフォードを退学し、ロンドンの The Inns of court またはニュー・イン (法学院) に入学した。その後 1794 年にリンカン・インに入学した。そこで 1494-c.1498 まで、専門の法律の勉強とギリシャ・ローマの古典を学んだ。1497 年にオランダの大思想家エラスムスと会い、その後彼との友情がはじまった。

モアは、1501 年に、下級弁護士になり、またファーニヴァル・インの講師となった。そしてカルトジオ会修道院に入った。彼はここで 1499 年から 1503 年まで生活した。この時期に本格的にギリシャ語の勉強をした。この年つまり 1501 年、アウグスティヌスの『神の国』の連続公開講義を行っており、評判を高めた。このころ彼は聖職者になりたいと考え、法律家になるか聖職者になるかを悩んだ。しかし独身を望まず、修道士にはならなかった。

1505 年はじめ、エセックスのジェイン・コウルトと結婚した。そしてロンドンのバックラーズベリの通りで 20 年生活した。結婚 7 年でジェインが亡くなり、すぐアリスと再婚している。アリスは連れ子アリス・ミドルトンがおり、またモアは養女マーガレット・ギッグスを貰い、子どもは長男ジョン、長女マーガレット、次女エリザベス、三女シシリーという大家族になる。

モアは 1504 年に、下院議員になった。1509 年にはヘンリー 8 世が即位した。

1510 年に、ロンドン・シティ選出の下院議員になった。そして、ロンドンのアンダー・シェリフ (司政長官補) にもなり、それを 1518 年まで勤めた。この在職中に多くの事件を解決したが、ほとんど収入にならなかったし、裁判費用をたいてい無料にしてやった。また各種の委員になった。1517 年 5 月 1 日に、モアは、外人排斥暴動を起こした徒弟たちを静めている。

1515 年 モアは、外交使節としてブルージュに行くことになった。5 月 12 日にロンドンを出発した。通商外交官が Antwerp へゆき、その随員として行ったのだった。彼は『ユートピア』の第 2 部をかいた。通商条約の更改が任務であった。当時、イギリスは羊毛の輸出国で、フランダー

スはその輸入国だった。この際またエラスムスに会ったし、オランダのヒューマニスト、ピーター・ヒレスにも会った。この人物は、名前が『ユトーピア』に出て来る。この年 9 月、アントウェルペンのヒレスの家に滞在していたモアは、『ユトーピア』の主要部分を執筆した。彼はフランダース（先進国）で勉強した。

彼は 10 月に帰国した。『ユトーピア』をロンドンで書き加えてから、1516 年の末にルーヴァンのティエリ・マルタン出版所から刊行した。ラテン語であった。

ユトーピアという語は、トマス・モアの造語であり、ラテン語 Utopia である。発音はウトーピアが正しい。Utopia (Louvain 1516)。その第 1 部は 1516 年に、第 2 部は Antwerp で 1515 年に、ラテン語で書かれた。第 2 部のほうが早い。正式には、Thomas More, Utopia. De optimo reipublicae statu, de que nova insula Utopia. Part I 1516, Part II 1515 Antwerp. (ラテン語) である。

『ユトーピア』によって More は、近世最大の共産主義思想家の列に入った。なぜこの時代にこのような思想を持ちえたのか。その理由は、第 1 に、ヒューマニストとしての More が、イギリスの現状に批判の目を向けざるを得なかった。すなわち当時イングランドは専制的君主の時代であり、まれに見る専制君主ヘンリー 8 世が当主であった。ちなみに Utopia, Part I はヘンリー 8 世の政治批判である。第 2 に、More はプラトンの『国家論』を読んで、影響を受けていた。プラトンは、そこで一種の部分的共産主義を表明していた。これはプラトンではなく、ソクラテスといってもよい。また、その思想は古代の奴隷制の下でのものであるが。第 3 に、教会内部で従来、私有財産制と共有財産制との論争があった(11)。第 4 に、More が第 1 級の教育を受けた。最後に、もちろん彼の才能による。

More は宮廷に入れといわれ、その時「本当にいやであった」と 1518 年に友人 Erasmus (オランダ) は証言した。おそらくその理由は Utopia 中のラファエル・ヒスロディの言葉(12)に表されるであろう。

1517 年つまり『ユトピア』の出版の翌年、モアはヘンリー 8 世の宮廷に仕えることになった。だが彼はどんどん「出世」してゆく。例えば、1517 年には王の参議会員、1521 年にアンダー・トレジャラー(財務次官)、そしてナイトになった。1525 年にはランカスター公領の司政長官という具合である。

1526 年にモアはヘンリー 8 世の側近になる。そして 1529 年 10 月 26 日に大法官 (Lord Chancellor) になった。大法官は国王に次ぐ高位で、日本流に言えば首相にあたる。More は当代随一の文人で、最も教養の高い人であり、行政手腕に秀でていたから、貴族・貴侶以外から大法官になった初めての人であった。だがこの時、自分の命の危ないことを感じていた。

さて彼はカトリックであったために、ヘンリー 8 世の離婚に反対した、より正確に言えば、賛成しなかった。

その間モアは、外交使節としても活躍する。1517 年 8 月に大陸へつまりカレーへ行く。1520 年にもカレーへ行く。1527 年にフランスへ行く。1529 年にはカンブレーへ行く、などである。

彼は多くの作品を執筆している。『リチャード 3 世王物語』History of Richard III(13)は、おそらく 1528 年ころまでに完成していただろう(伊達説)とされる。これはシェークスピア(14)の『リチャード 3 世』に利用された、とされる。モアは、1523 年には『反ルター論』を書いている。1529 年 6 月に、『異端に関する対話』をロンドンで出版した。彼はカトリックであるから、反ルター主義者である。彼はその後、ルター主義者を弾圧したこともある。さて 1532 年に彼はこの大法官を

やめさせてもらった。その理由は、ヘンリー 8 世の離婚問題であった。

More の思想史上の位置は、もちろん今から見れば矛盾している。かれはカトリックであって新興のプロテスタンティズムに反対している。また信条を守って殺されたため、カトリック教会では殉教者・聖人として敬まわれている。

『ユトピア』は、初版 Louvain 1516；2 版 Paris 1517；Basel-フローベン 1517；1520 Paris；1548 レーヴェン；1613 ハノーファー；1629 ケルン；1631 アムステルダム；1633 オクスフォード；1750 グラスゴウ、がある。英語訳 1551 1. ed.; 1556 2. ed.; 1597 3. ed.; 1624. 4. ed. Ralphe Robynson 訳；1684. G. バーネット訳；1887 モーレー訳がある。中国訳がある。日本語訳は、岩波文庫；中公文庫にある。

More は Utopia など以外に、獄中の詩、などを書いている。

- (1) オライソラ『女王ファナ』角川文庫。
- (2) More, Henry VIII, Anne の肖像画は National Portrait Gallery (London) にある。
- (3) 案内書として、The Tower of London (London 1967) がある。
- (4) 今ではこの中には、博物館、展示館、チャペルなどがあり、宝物・武具などが展示されている。いくつかの塔は見学ができる。
- (5) 大塚金之助『解放思想史の人々』岩波書店 1949 年、40 ページ。
- (6) 田村秀夫『ユトピアの成立』中央大出版 1978 年、37 ページの写真。
- (7) フレイザー『ヘンリー 8 世の六人の妃』創元社。
- (8) ツヴァイク『メアリー・スチュアート』。小西『華麗なる二人の女王の闘い』朝日文庫。
- (9) Christopher Hill, Society & Puritanism in Pre-Revolutionary England. London 1966.
- (10) 青木道彦『リザベス 1 世』講壇社現代新書。ストレイチー『エリザベスとエセックス』中公文庫。石井美樹子『ルネッサンスの女王 エリザベス』朝日新聞社。
- (11) Cf. マックス・ベア『イギリス社会主義史』(1)岩波文庫。
- (12) 邦訳『ユトピア』岩波文庫、16～18 ページ。
- (13) Campbell, ed., The English Works of Sir Thomas More. vol. 1. London/N. Y. 1931.
- (14) 古くは、斉藤勇『シェークスピア研究』(研究社)があった。最近、ソプラノ『シェークスピア・ミステリー』朝日新聞社、が出た。反ストラトフォード派の見解。

モア研究書

Karl Kautsky, Thomas More und Seine Utopia. 1. Aufl. 1887; 2. Aufl. 1907; 3. Aufl., Berlin 1926. [渡辺訳『トマス・モアとユトピア』法政大学出版、1956 渡辺訳、1969 年改訂訳]；英訳あり。

Russel Ames, Citizen Thomas More and his Utopia. 1949. Princeton U.P.; New York 1969.

R. W. Chambers, Thomas More. [1936]; Toronto 1965.

伊達功『近代社会思想の源流』ミネルヴァ書房 1970 年。

日本トマス・モア協会『トマス・モアとその時代』研究社 1978 年。

日本イギリス哲学学会『トマス・モア研究』御茶の水書房 1978 年。

田村秀夫『ユトピアの成立』中央大出版 1978。

田村『イギリス・ユトピアの原型』中大出版。

Max Beer, History of British Socialism. 1940 訳あり。

ヘクスター『モアの「ユトピア」』御茶の水書房。

シェークスピア『サー・トマス・モア』河出書房新社。シェークスピアがこの半分を書いた、と。

映画(邦題『わが命果てるとも』)トマス・モアの生涯がイギリスで映画化され、アカデミー賞各部門を受けた。

その他 Erasmus のフッテンあて手紙、1519。

モアの伝記

ウィリアム・ローパー (-1577)、長女マーガレットの夫。「トマス・モアの生涯 — 女婿ウィリアム・ローパーの記述したる」。最初の伝記。「モアの生涯を知るための、最も重要で、いちばん信頼できる資料の提供者である。」(カウツキー、116 ページ)。上記日本トマス・モア協会編書で訳出された。

トマス・ステイプルトン 1535-1588 「3 人のトマス — 使徒トマス、聖トマス・ベネット、トマス・モアの伝記」 1588 — 「ローパーについて、モアの伝記を知るためにはきわめて重要である。」(カウツキー、120 ページ)

モアの曾孫トマス・モア (-1625) 「ヘンリー 8 世治下の英国大法官、独仏宮廷への国王使節トマス・モア卿の生涯 — その曾孫トマス・モア記すところの」 1627 London、新版 1726 London、1741 Leipzig ドイツ語「ローパーとステイプルトンと並び、モアの生涯を知るための第 3 の主要な資料提供者といわれる」(カウツキー、120 ページ)

T. ハンター、1828 Lond. 著者はクリセイカー・モアと。「クリセイカーの本は、ほんとに無価値なものというほかない。ローパーとステイプルトンからの抜粋にすぎない。」(カウツキー、123 ページ)

他の伝記作家、ニコラス・ハーブスフィールド、ルドウィクス・パケウス、ハーダード、ブリジッド、シーボーム、ハットン。

More の著作集。ラテン語、1563 パーゼル、1566 レーヴェン、1689 フランクフルトとライプチヒ。英語、1557 Lond.

論文・詩 in: A. ケーリー「トマス・モアの言行録」全 2 巻 Lond. 1804

in: ウォルター「トマス・モア卿」ボルチモア 1841

日本語訳では、岩波文庫、中公文庫、中央公論の『世界の名著』。

Everyman's Library. No. 461 に More の A dialog of comfort がある。